あいだで考える

正解のない問いを考え
多様な他者と生きる。

シリーズ

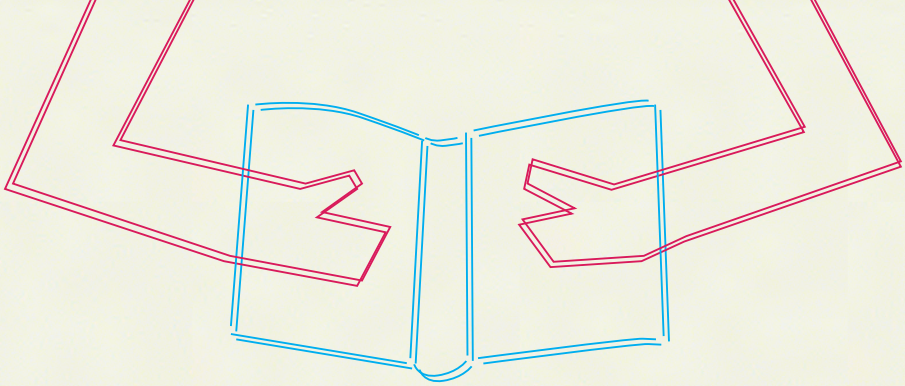
「あいだで考える」創刊

不確かな時代を共に生きていくために必要な
「自ら考える力」
「他者と対話する力」
「遠い世界を想像する力」
を養う多様な視点を提供する、
10代以上すべての人のための人文書のシリーズ

2023年
4月刊行
開始！

●**造本：**四六判変型（横 130× 縦 168mm）
並製・128~160 頁
各巻予価：1,540 円（本体 1,400 円）⑩
●**対象年齢：**中学生から大人まで

創元社



シリーズ「あいだで考える」

創刊のことば

私たちは、本を読むことで、他者の経験を体験できます。

本の中でなら、現実世界で交わることのない人々の考えや気持ちを知ることができます。

自分と正反対の価値観に出会い、想像力を働かせ、共感することができます。

本を読むことは、自分と世界との「あいだに立って」考えてみることなのではないでしょうか。

さまざまな局面で分断が見られる今日、多様な他者とともに自分らしい生き方を模索し、皆が生きやすい社会をつくっていくためには、白でもなく黒でもないグラデーションを認めること、葛藤を抱えながら「あいだで考える」ことが、ますます重要になっていくのではないでしょうか。

シリーズ「あいだで考える」は、10代以上すべての人のための人文書のシリーズです。

書き手たちは皆、物事の「あいだ」に身を置いて考えることの実践者。その生きた言葉は、「あいだ」を考えるための多様な視点を伝えます。

それを読むことは、自ら考える力、他者と対話する力、遠い世界を想像する力を育むことを助け、正解のない問いを考えてゆくためのねばり強い知の力となってゆくはずです。

先の見えない現代、10代の若者たちもオトナと呼ばれる世代も、不安やよりどころのなさを感じ、どのように生きてゆけばよいのか迷うことも多いはず。

本シリーズの一冊一冊が「あいだ」の豊かさを発見し、しなやかに、優しく、共に生きてゆくための案内人となりますように。

そして、読書が生きる力につながる実感を持ち、知の喜びに出会っていただけますようにと願っています。

シリーズ「あいだで考える」を推薦します

（五十音順）

「あいだ」は物事を接続するだけではなく、
次の段階に進むための踊り場でもあります。
これからの世界に飛び込む「きみ」が
新しい自分と出会うきっかけになります。
ぜひ、手にとってみてください。

ウスビ・サコ
（京都精華大学 前学長）

あいまいさを受け入れる粘り強さ。
そこから言葉にならない
真理が見えてくる。

小川洋子
（小説家）

いちばん大切なことは「あいだ」にある。
あれとこれのあいだ。あそことここのあいだ。
自分と誰かのあいだ。
だから、ぼくは「あいだ」に関する本も書いた。
そんな本がこれから、ここから、
たくさん生まれる。
すごくうれしい。

高橋源一郎
（作家）

人と人のあいだ、人々と人々のあいだが
困難なこの時代こそ、ひとつひとつ、
立ちどまって考えることが大切。
気鋭の書き手が多様な切り口で
「いま」を読み解き、
生きるための思考を
広げてくれるシリーズです。

土居安子
（大阪国際児童文学振興財団理事・総括専門員）

シリーズロゴについて

巻き貝を耳にあててみるように、「あいだ」から聞こえてくる声や、音に、一緒に耳を澄ませてみませんか。そんな思いを込めたロゴデザインです。

デザイナーから

「巻き貝に耳をあててごらん。海の音が聴こえるよ」
幼い日、だれからか教わって、サザエでもハマグリでも貝を見つけると、まず耳にあてて、音を聴いてみるようになりました。
でも、どの貝でも海の音がするわけではありません。じっと耳を澄ましているうちに、どうやら音は貝が発しているものではなく、貝とぼくの耳の「あいだ」にあるらしい、と気がつきました。
ふだん、ふつうに生きていると聴こえない音が、巻き貝を耳にあてるときだけ聴こえてくる。おなじように、日常のなかでは、なかなか見えてこないものがあります。
このシリーズの本をひらくことで、さまざまな「あいだ」の音を聴くことができたなら――そう思ってデザインしました。（矢萩多聞）

シリーズの特長

10代の関心を誘う
幅広いテーマ設定。
「正解のない問い」を考える。

知識よりも、多様な視点を重視。
新しい価値観や考えを
知るきっかけに。

多彩でユニークな著者陣。
実社会のさまざまな分野での
「実践者」「当事者」
であることを重視。

中学校以上で習う漢字・読みは
ルビつき。
＊章ごとの初出。

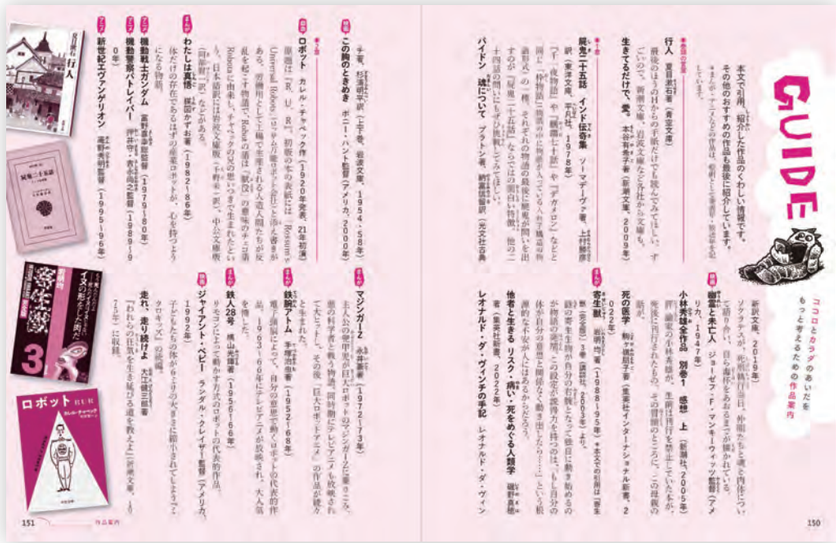
巻末の**作品案内**で、
文学、漫画、映画など
さらに興味が広がる
多様な作品を紹介。

「自分」を分ける

人は一生、ずっと自分でありつづける。
考えてみれば、すごいことだ。
どんなことでも、ずっとつづけていれば飽（あ）きてくる。
だから、自分に飽れるのは、当然のことだ。
しかも、そんなにずっと自分なのに、自分のことがよくわからない。
昆虫（こんちゅう）を観察しつづけたファーブルは昆虫学者になった。私たちもそれぞれ自分学者と言えるくらい、自分のことがよくわかっていてもおかしくない。でも、そうはならない。
自分は、自分にとっても思いがけないことを言ったりする。自分はそんな人間ではないと思うことを、したりする。そういう、えたいの知れないところがある。
よくわからないものと、ずっとつきあうというのは、これも飽れることだ。
なんとか少しでもわかりたいと思う。
「わかる」は「分かる」とも書くように、わからないものに対して、人はまず分け

「自分」というものを、なんとなく「心」と「体」の2つに分けて、考えがち。
それはなぜなのか？
そして、心と体では、どちらのほうが、より自分なのだろう？
インドの王様の答えは？
ギリシアの哲学者（てつがくしゃ）のソクラテスの考えは？
そして、あなたはどう思う？

本文見本（2色印刷）



ブックデザインは
矢萩多聞（やはぎたもん）が担当。
本の世界にすっと入れる
読みやすい紙面デザイン。
思わず手にとりたくなるような
モノとしての
楽しさ・美しさを大切に、
**「わたしの本」として
愛着がもてる造本。**

わかりやすい文章と、
短く章立てした
コンパクトなつくり。
中高生や本を読み慣れていない方でも
「1冊読んだ」
「ひとまとまりの知を身につけた」
という充実感を持ち、
楽しい読書体験を得られる。

刊行ラインナップ

※2023 年 3 月時点。2023 年 6 月以降のタイトルはすべて仮

頭木弘樹

2023 年 4 月

自分疲れ
――ココロとカラダのあいだ

装画　香山哲

難病の実体験に基づいたユニークな文学紹介活動を展開している著者が、「自分自身でいることに疲れを感じる」「自分自身なのになぜかなじめない」といった「違和感」を出発点にして、文学や漫画、映画など多彩なジャンルの作品を取り上げながら、心と体の関係性について考察していく。読者が「私だけの心と体」への理解を深める一助となる一冊。

◆ **頭木弘樹（かしらぎ・ひろき）**　文学紹介者。20 歳のときに難病（潰瘍性大腸炎）にかかり、13 年間の闘病生活を送る。そのときにカフカの言葉が救いになった経験から『絶望名人カフカの人生論』（飛鳥新社／新潮文庫）を編訳。著書・編書に『うんこ文学』（ちくま文庫）『ひきこもり図書館』（毎日新聞出版）『食べることと出すこと』（医学書院）ほか多数

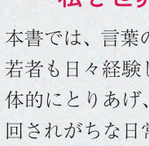
戸谷洋志

2023 年 4 月

SNSの哲学
――リアルとオンラインのあいだ

装画　モノ・ホーミー

10 代の生活にすっかり溶け込んでいるＳＮＳの利用をめぐるさまざまな現象――「ファボ」「黒歴史」「#MeToo運動」など――を哲学の視点から捉え直し、この世界と自分自身への新しい視点を提供する。若い読者に「物事を哲学によって考える」ことの面白さと大切さを実践的に示す一冊。



◆ **戸谷洋志（とや・ひろし）**　1988 年生まれ。関西外国語大学英語国際学部准教授。専攻は哲学・倫理学。技術思想および未来倫理学を探究する傍ら、「哲学カフェ」の実践などを通じて、社会に開かれた対話の場を提案している。著書に『友情を哲学する』（光文社新書）『未来倫理』（集英社新書）『NHK100 分 de 名著 ハイデガー『存在と時間』』（NHK 出版）ほか多数。

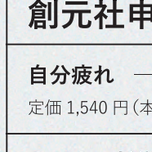
奈倉有里

2023 年 6 月

ことばの白地図を歩く
――翻訳と魔法のあいだ

装画　小林マキ

ロシア文学の研究者であり翻訳者である著者が、自身の留学体験や文芸翻訳の実例をふまえながら、他言語に身をゆだねる魅力や迷いや醍醐味について語り届ける。「翻訳」を主軸のテーマとしながら、「文学や文化で何を分かち合えるのか」「人の言葉にどう向き合えばいいのか」などを読者と一緒に”クエスト方式”で考える。



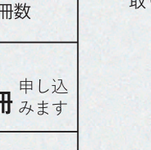
◆ **奈倉有里（なぐら・ゆり）**　1982年生まれ。ロシア文学研究者、翻訳者。ロシア国立ゴーリキー文学大学を日本人として初めて卒業。著書『夕暮れに夜明けの歌を』（イースト・プレス）で第 32 回紫式部文学賞受賞。訳書に『亜鉛の少年たち』（スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ著、岩波書店）『赤い十字』（サーシャ・フィリペンコ著、集英社）ほか多数。

田中真知

2023 年 8 月

風をとおすレッスン
――人と人のあいだ

中東やアフリカなどで長年過ごしてきた著者が、旅の経験や、古今東西のさまざまな文化事象、文学作品の例などをつうじて、人と人との「あいだ」を見つめ、そこに風をとおし、互いに自由になれる関係をつむぐための方策を読者とともに考える。迷いや悩みの多い 10 代の方たちにとって、より軽やかにたくましく生きていくためのレッスンとなる一冊。



◆ **田中真知（たなか・まち）**　1960 年生まれ。作家、翻訳家、立教大学講師、あひる商会 CEO。著書に『旅立つには最高の日』（三省堂）『美しいをさがす旅にでよう』（白水社）『孤独な鳥はやさしくうたう』（旅行人）『増補 へんな毒すごい毒』（ちくま文庫）ほか多数。『たまたまザイール、またコンゴ』（偕成社）で第一回斎藤茂太特別賞を受賞。

坂上香

2023 年 10 月

根っからの悪人っているの？
――被害と加害のあいだ

著者の映画作品「プリズン・サークル」は、20代の受刑者 4 人を軸に、刑務所内での TC（回復共同体）という更生プログラムの過程を追ったドキュメンタリー。本書は、この映画を手がかりに、著者と 10 代の若者たちとが「サークル（円座になって自らを語り合う）」を行なった記録である。映画の主人公（元受刑者）のうちの二人や、犯罪被害の当事者もゲストに迎え、「被害と加害のあいだ」をテーマに語り合う。

◆ **坂上香（さかがみ・かおり）**　1965年生まれ。ドキュメンタリー映画作家。NPO 法人 out of frame 代表。一橋大学大学院社会学研究科客員准教授。映画作品に『Lifers ライファーズ 終身刑を超えて』『トークバック 沈黙を破る女たち』があり、3 作目の「プリズン・サークル」は文化庁映画賞・文化記録映画大賞受賞。著書に『プリズン・サークル』（岩波書店）など。

最首悟

2023 年 12 月

能力で人を分けなくなる日
――いのちと価値のあいだ

本書は、重度の身体障害者である三女・星子さんとの暮らしや、2016 年津久井やまゆり園事件の犯人である植松青年とのやりとり、さらに 1977 年以来の水俣とのかかわりについて 10 代の若者と語り合った記録である。優生思想、能力主義、教育の意味、産業社会とひとりひとりの生、差別、自立と孤立……などを一つ一つ話し合い、〈いのち〉に価値づけはできるのか、「共に生きる」とはどういうことかを考える。

◆ **最首悟（さいしゅ・さとる）**　1936 年生まれ。生物学者、社会学者、思想家。和光大学名誉教授。1977 年より第一次不知火海総合学術調査団（水俣病に関する人文･社会科学分野での最初期の社会調査）に参加、第二次調査団長を務めた。著書に『新・明日もまた今日のごとく』（くんぶる）『「痞」という病いからの』（どうぶつ社）など多数。

栗田隆子

2024 年 2 月

ハマれないまま、生きてます
――こどもとおとなのあいだ

「『おとなになる』って何？」「私、何歳になっても『おとなになった』気がしない」――いま、「おとな像」はますます曖昧になっている。本書では、不登校や非正規労働を経た著者が、近年の「おとな像」の変化を追い、おとなと子どもの境界線はつねに揺れ動き、その規範は往々にして社会の要請に基づいていること、「大人っぽさ」のイメージと「女らしさ／男らしさ」といったジェンダーの意識との結びつきなどを考える。

◆ **栗田隆子（くりた・りゅうこ）**　1973 年生まれ。文筆家。非正規雇用者として働きながら女性の貧困や労働問題の解決に向けたアクションを行うグループやネットワークに関わる。現在は新聞・雑誌などでの執筆を中心に活動。著書に『呻きから始まる』（新教出版社）『ぽそぽそ声のフェミニズム』（作品社）、共著に『高学歴女子の貧困』（光文社新書）など。

いちむらみさこ

2024 年 4 月

ホームレスでいること
――見えるものと見えないもののあいだ

野宿者として、またアーティストとして、国内外で反ジェントリフィケーションやジェンダー、貧困、マイノリティなどをめぐって活動してきた著者が、自身や周りのホームレスの人々の生活を伝え、現代社会の風景の中の「見えているのに見えないことにされているもの」「隠されているもの」「消されたもの」などについて、10 代の読者に語りかける。

◆ **いちむらみさこ**　1971年生まれ。2003年から現在まで東京都内の公園のブルーテント村に住み、仲間の住人と共に物々交換カフェ「エノアール」を開くほか、ホームレスの女性たちのグループ「ノラ」を運営。著書に『Dear キクチさん、ブルーテント村とチョコレート』（キョートット出版）、責任編集書に『エトセトラ VOL.7 くぐり抜けて見つけた場所』（エトセトラブックス）。

斎藤真理子

2024 年 8 月

隣の国の人々と出会う
――韓国語と日本語のあいだ

いま、韓国の文学やドラマ、映画や音楽はますます人気を博している。一方、韓国と朝鮮半島の歴史や社会については、最も近い「隣」であるにもかかわらず、よく知らない場合も多い。本書では、韓国文学翻訳者の著者が、朝鮮半島と現代の韓国の人々は「ことば」とどのようにかかわり、何を託してきたのか、その一つ一つがどのような歴史を持つのかを、日本語との比較を交えつつ、多角的に捉え、味わい、読者とともに考える。

撮影：増永彩子

◆ **斎藤真理子（さいとう・まりこ）**　1960年生まれ。韓国文学の翻訳者。著書に『韓国文学の中心にあるもの』（イースト･プレス）、訳書にパク・ミンギュ『カステラ』（共訳、クレイン）チョ・セヒ『こびとが打ち上げた小さなボール』（河出書房新社）チョン・セラン『フィフティ・ピープル』（亜紀書房）チョ・ナムジュ『82 年生まれ、キム・ジヨン』（筑摩書房）など多数。

古田徹也

2024 年 10 月

言葉なんていらない？
――私と世界のあいだ

本書では、言葉の「制御できない力」の側面を糸口に、10 代の若者も日々経験しているであろう言葉とのかかわりの場面を具体的にとりあげ、哲学の視点で見つめ直してゆく。言葉に振り回されがちな日常生活の中で、読者が言葉と自己とのかかわりを距離をとって見つめ、すこし楽になり自由になること、また、言葉に対する別の見方を提供し、新たな興味を呼び起こすことにつながる一冊。

◆ **古田徹也（ふるた・てつや）**　1979 年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科准教授。英語・ドイツ語圏の現代哲学・倫理学を研究。著書に『このゲームにはゴールがない』（筑摩書房）『いつもの言葉を哲学する』（朝日新書）『はじめてのウィトゲンシュタイン』（NHK BOOKS）など多数。『言葉の魂の哲学』（講談社選書メチエ）で第 41 回サントリー学芸賞受賞。

創元社申込書　シリーズ「あいだで考える」

	注文冊数
自分疲れ　――ココロとカラダのあいだ 定価 1,540 円（本体 1,400 円）税　ISBN978-4-422-93098-5　C0395	冊　申し込みます
ＳＮＳの哲学　――リアルとオンラインのあいだ 定価 1,540 円（本体 1,400 円）税　ISBN978-4-422-13011-8　C0310	冊　申し込みます

取り扱い店名

※この注文書でお近くの書店さまへご注文ください。書店ご不便の場合は直送もいたします（詳細は創元社 WEB サイトをご確認ください）。

ご住所　〒　　―

お名前　フリガナ

ＴＥＬ　（　　）　　―